

# 緒 言

紀要編集委員会

本学には、他大学を含む大学での豊富な教育経験や、大学以外の幅広いフィールドでの社会経験を有する教員が在籍している。重鎮たる彼らは、自身の経験を本学での教育にどのように生かしているのだろうか。あるいは今後どのように生かしていきたいと願い、本学の今後にどのようなことを期待しているのだろうか。

教育の現在と未来を考える上で彼らの見識に学ぶべく、このたび紀要編集委員会は本特集を企画した。寄稿を依頼した教員には特集の趣旨を念頭に置いたテーマをそれぞれ設定して自由な見解を述べていただくこととし、各々の専門に引きつけた論考も歓迎する旨を伝えた。

執筆者各位は企画の趣旨をよく汲んでくださり、瑞々しい報告、そして示唆に富む提言をお寄せくださった。いずれも多様な〈現場〉の息吹を伝える論考である。終わりのない議論がこれから始まることだろう。

## 教えること、教えられること

大 野 実（表現文化学科特任教授）

「社会経験のある大学教員」という言葉や在り方が、一般的になったのはいつごろだったのだろうか。私自身のことでは、**「大学の先生」という職業に「なりたい」とか「自分に当てはめてみる」とか**思ったこともなく、遠い、無縁の存在だった。従ってどうすればなれるのかとか、何を準備しなければならないのか、どんな資質が要求されるのか、等々の問いは頭の中に浮かぶことすらなかった。

今ネットで調べてみると「社会人から大学教授になる方法」とか「ビジネスマンが大学教授、客員教授になる方法」とかの本が出ていて、「大学教授公募の裏側」も教えてくれるらしい。ここから類推するに、社会人から教授への道はそう珍しいことではなく、少なくとも一般の関心と呼ぶテーマにはなり得ている、ということだろう。これらの本は読んだことがないので何が書かれているのかは知らないのだが、今回執筆依頼の文章の一部にも「自身の経験を本学での教育にどのように生かしているか、今後どのように生かしていきたいか」とあったように、「社会経験（つまりは仕事を通じて得られた知見）を踏まえ、それをもとに教育する」ことが期待されている、求められている……といったあたりで大きな間違いはないだろう。

つまり、本来の（専門分野で深く学び真理を探求し論文にまとめ修士なり博士となって大学で教えるようになる）教員との違いは、昔風に言うところの「象牙の塔」ではない場所で、研究に代わる実践をどのようにしてきたのか、その経験を学生にとって有用な教えにどう進化させていくのが重要なポイントになっているのだろう。しかし、自分の場合教員になろうという意思がそもそもなかったため、そのような観点で「次の職業」のための助走として仕事に取り組むことはなかったし、それが教育につながるのかつながらないのか考えてもみなかった。

会社員時代、携わっていたのは主にアニメーションを中心とするテレビ番組等の企画制作。いわゆるコンテンツのプロデュースで、そこで「生産」されるものには定まった機能・効能もなく、「世界観を楽しむ」というある種特殊なジャンルだった。今でこそ「クールジャパン」の代表格のように言われ注目も浴びているが、長いこと隙間産業扱いされてきたのも事実だ。勤めていた広告会社の中でも花形は営業とかCM制作職。当時はアニメという言い方も一般的ではなく、テレビ業界でも「まんが映画」と称されていたように、どちらかと言えば「子ども相手の、二流とは言わないまでも傍流番組」視されていたのが実態だ。日本初のテレビアニメ・シリーズ「鉄腕アトム」が放映されたのが1963年。私が入社してアニメに携わり始めたのが1971年だから、まだ草創期と言える時代だった。テレビ局にも「傍流」を目指して入社してくるような人はいなかった。

自分自身でも、まさかその後「アニメー筋」で会社員人生を過ごすとは思ってもよらなかった。そもそも広告会社に入ったのはCMなどのクリエイターになるつもりだったから、当初は「まんが？何それ？」という感じだった。

ところが……と、以降のアニメ・プロデューサーとしての「仕事ぶり」「奮闘ぶり」を微に入り細にうがち述べることはしないが、「山あり谷あり」とよく言うけれども、自分の場合には社会人生活はいきなり深い谷から始まったということなのである。それではそのアニメの仕事人生期間中、ずっと不遇をかこつ気持ちでいたのかというと、それもまた違って意外なことに……と、ついつい長くなりそうになる。

要は社会人経験といっても、中身も気持ちも一括りには言い表せないもので、その経験やら実践のどの部分を教育に生かせるのか、なかなか自分でもすぐには判断できない。ましてその途中で「どう生かすか」を考えてこなかったのが、準備万端、用意周到とはいかなかった、ということなのだ。「次」の材料や教訓を得ようと仕事をしてきたわけではないので、当然といえば当然でもあるだろう。

さて、経験（仕事）を通して得られた知見を一体どのように次代につなげていくのか、生かしていくのかが問われている。最近よくメディアでも取り上げられる「実学か教養か」という大学での学びに関する議論では、社会人経験教員に求められているのは、仕事に直結する、社会に出てすぐに役立つ技能や知識を教えること、と考えるのが一般的だろう。ところがそう決めつけられても、いつの時代のどの仕事の部分……というのは、実はそう簡単には答えられないものだ。特に技術そのものやハウツーに類する知識・方法をいくら伝えたところで、それらはすぐに陳腐化する。人工知能が駆逐する（だろう）職業・職種のあまりの多さに呆然とする人は少なくないだろう。長い経験や実践を通して得たものと言っても、その有効期間・賞味期間はいつまでなのか甚だ心許ない時代になっている。

政治学者で東大名誉教授の姜尚中氏は、自らの読書術を語る中で「干もの」「生もの」という言い方をしている。「干もの」はどちらかと言えば時間を経ても色あせない確立された古典に近いもの、それに対して「生もの」は日々の新聞やセンセーショナルな話題・流行を追う週刊誌も含めたマスコミの報道・論調など、と。

加えて氏は「これまで大学では『干もの』中心の教育でよしとする風潮が強かったが、『生もの』を教育の一環として取り入れること、その中に今日的課題や今後の見通しを見つけていくことも大切」という主旨の発言をされている。そしてリーダー論では「自分だけが先行して、

後からついてくることを求める一歩先、二歩先でなく、半歩先を見出し歩む人」が望ましいと語っている。「歴史と勝負する」という表現もあった。

積み重ねられた知識に裏打ちはされているけれども、それだけではなく、「今」何が起きているかを知り「ちょっと先」を見通す力こそが求められている。飾らない日々の暮らしぶりの中に変化・変革の兆しは現れていて、知識や考察に高尚も下等もないのではないか……、氏の考えはそういったものだと私は解釈した。

コンテンツや広告の世界では、流行を追う、トレンドを見つける、人の動きを知る、人を動かすことが何よりも重要……と一般には思われているのではないだろうか。勿論それは当たってはいるのだが、常に最先端、最新だけを追い求めているわけではない。それに加えて「歴史を知る、過去に学ぶ」という姿勢が重要視される点は、姜尚中氏が言うところの「干もの」と「生もの」の喩えと類似している。流行の前段階での「兆し」から変化・進化・深化の匂いを感じ取ることが、コンテンツや広告の世界では最も重要であると私は考えているが、感じ取るための感性や感覚に知性や知識は無用というわけにはいかない。

縁があって考えてもこなかった大学での教育に携わるようになり、最初に感じたのは、多くの若者たちが「覚えること」に汲々とし「まず正解を探そうとすること」だった。そしてそれが「面倒くさいこと」「どうせ出来ないこと」と自己判断すると、すぐに（ほとんど総ての）興味を失っていくことだった。

誠に惜しい。

世の中に「かつてなかった誰も知らない空前絶後の新企画」なるものは存在しない。総ての企画は、すでにある無数と言っても良いあらゆる種類の「過去の実績」に含まれている途方もなく膨大な要素から、いくつかを抜き出し、それを掛け合わせることから出発している。「干もの」の中に宝が隠されているし、またその中にある原石を見つけるためには、「生もの」に秘められている兆しに敏感でなければならない。どちらかが一方的に優位にあるということではなく、あくまで両立が望ましい。

ところが姜尚中氏も指摘するように、これまでの大学教育は「干もの」中心、いや偏重であった、という批判が今日産業界中心になされている。若い人の多くは、漢字や英単語や文法や定理や公式を覚えることこそが「学び」であると言われ続け、問いに用意されている正解にいかにも早くたどり着くか、の競争をずっとし続けてきたのではないか。そして大学でもそれは引き継がれていると判断して、興味の範囲が端から極めて狭くなっているのではないだろうか。

本学の「キャリアアップセミナー」で講師をお願いした楽天野球団の立花陽三社長は、球団が提供する様々なファンサービスのことを「コンテンツ」と表現し、新たなコンテンツを考えることが日々の社員の仕事、との話をされた。このように今日ではアニメや映画や番組だけでなく、消費者とともに財やサービスの価値観を高め共有・共感・共創していく過程そのものをコンテンツと呼んだりしている。そしてその過程・作業の基になるヒントは「生もの」なくしてはあり得ないのだ。

少なくとも自分が関わってきたビジネスの分野では、問いに正解はそもそも用意されていないし、答えそのものよりそこにたどり着くまでの多様な思考回路が尊重されてきた。学力=基礎知識という考え方は長い間正しいとされてきたように思うが、誤解を恐れずに言うと、社会、ビジネスの最前線では深淵な真理の追求と今朝電車の中で見かけたこととの間に決定的な差、

優劣はない。大事なのは、どちらも有効に使う、使い倒すという姿勢そのものにあると思う。

自分自身、当初はアニメや漫画に対する認識も浅く知識もある方ではなかった。それでも何とかコンテンツを送り出す側でいられたのは、この「姿勢」があったからだと思うし、それを継続していれば自ずと「知識」「干もの」への関心・興味・欲求も湧いてくる。本来、若者は流行や社会現象に敏感で関心も高いはずなのだが、その興味が「役に立つもの」と思っていないフシがある。それは従来受けてきた教育の賜物でもあるのだが、少し見方を変えよう、という気持ちで臨んでいきたいと私は考えている。量を増やすことを早めに諦めてはいけませんが、知識の量の差だけでビジネスは決まるものではない。

幸い、メディアやコンテンツに関する話題や動きはほぼ毎週のように報じられている。この生の情報の意味や位置づけを考えることを通して、若い人たちには「半歩先」を見つける訓練をしていってもらいたいものと思っている。

## 教育の現在と未来

三 好 敏 之 (人間心理学科教授)

先日、ベトナムのダナン師範大学を訪問した。私は、大学生や大学院生、大学教員や関係機関の人々が動作法を真剣に学び、積極的に質疑応答する姿に感銘を受けた。この国では、平均給料が2～3万円である。ダナン市には海辺があり、住民は朝5時頃から散策、ヨガ、軽音楽をかけてのダンス、砂浜ではビーチバレー、ダーカウ（重い羽根を足の内側、外側、時にはクロスして太腿、胸、頭等も自由に使って羽根が落ちないように続けるスポーツ）をいろいろな年齢層が楽しんでいる。海辺の活動はグループで行っている。どのグループに入っても気楽に参加させてくれて自然とコミュニケーションができて、楽しい。また、遠浅の海で海好きな人は、朝から両脇に軽いペットボトルのような浮をつけて海をゆっくりと歩くのである。私も海に入って散歩した。とても気持ちのよい体験であった。その後のシャワーで身体がよりすっきりした。多くのダナンの市民の方が朝から活動し、家族同士でレストランや屋台で外食し、とても楽しく会話している。それぞれが自分の人生を楽しみ、家族や仲間とのコミュニケーションを楽しみ、安い給料も気にせず働いている。私は、彼らが日本人よりも生き生きと暮らし、笑顔が多く、表情がよく、人生を楽しんでいると思った。

今の日本はどうであろうか？情報化が一層進み、経済の発展と共に、核家族化が益々進んでいる。そのため、地域での人々のつながりは薄れてきて、日本人自体が何か疲れている感じがする。

教育においてもいじめや不登校、非行などをはじめとして、校内暴力や学級崩壊が多く見られる。学力低下や受験戦争、活字離れなどの問題も進んでいる。これらに加えて、外部的な要因として都市化や少子高齢化も深く関係しており、それと共に学校裏サイトやラインいじめなどの問題も関わってきている。学校教育制度自体の問題も、教育問題として非常に深刻化している。受験やそれに伴う学力差の発生、学歴主義なども広く知られている。大学倒産時代をは